

——2016年の社長就任以来、組織改革を進めてきた。この意図をあらためて聞きたい。

「日本製造に来てみて、人を大事にすること、会社の方向性をはっきり打ち出すことが課題だと考えた。組織の壁を越えて連帯感を高め、人材の流動化を含めて一体運営する必要も感じた。コミュニケーションの活性化や職場環境の改善を進めたのも、当社にしては思い切った人事を行い、3事業部制を廃止して組織をフラット化したのも、その一環だ」

「同時並行で、生産性改善にせよ、収益性分析にせよ、『定量的管理』を重視し『見える化』を進めてきた。この2年はスピードが上がっている」

——業績動向も聞きたい。22年3月期の連結経常利益予想は7億円。中

日本製造 鷺尾 勝社長



2022 トップインタビュー 鉄鋼新時代の経営ビジョン

橋梁用支承「設計技術力生かし拡大」

「鋼製、ゴム製の橋梁用支承は、高速道路を含めて耐震強化、高機能・コンパクト化のニーズが強い。強みの設計技術力を生かし規模を拡大することで、エンジニアリング事業の収益力を高める。ゴムの安定調達も進める」

「素形材は半導体製造装置需要が旺盛だ。国内だけでなく中国などアジアや北米向けに輸出も始めています。一方で、エヌケーケーは池上から川崎への移管・

期経営計画では23年度16億円を目標にしている。資源を投入していくほか、建築用柱脚については販売チャンネルの開拓を図る。素形材事業では今後さらに成長が期待される半導体分野など当社の得意分野へ経営の強化を行っていく」

「目録達成のために、エンジニアリング事業では橋梁部品である支承や伸縮装置など当社の得意分野へ経営の強化を行っていく」

「この工具を主力にしていた池上工場の将来像は。JFEスチールの東日本製鉄所京浜地区の上工程休止に伴い、ユーティリティの制約から池上の操業についても考えていく必要がある。1月に川崎工場と池上工場を一体化し、鋳鋼工場（川崎地区、池上地区）に再編した。雇用は当然確保する。昨年より工具以外は池上から川崎への移管・

めどに生産を停止すること集約を進めていたが、川崎の半導体製造装置向け増産対応の優先度を上げて、移管は急がないことにした」

「工場内のIoT化やロボット・AIの導入に

オンライン受注システム導入

平水鉄鋼
材造鉄
連続

「川崎の造型職場でヘルメットにセンサーを取り付け動線解析を行い、レイアウト、人の移動や作業方法などの改善につなげている。職場の自主管理活動と成果をあげている。労働環境改善や生産性向上は、6月に押し湯の切断に自動ロボットも導入する。機械加工設備を皮切りに製造設備にも稼働率計を設置することで、電力使用や稼働状況の見える化も図っている」

「北陸電力と共同で取り組み、昨年7月から川崎地区で使用する購入電力を再エネ由来の非化石証書を使用したCO₂フリー電力に切り替えた。これにより当社のCO₂排出量の34%を削減する見込みだ。各工場の省エネ化、太陽光発電設備や燃料電池の導入、水素切断の検討など地道な取り組みも積み重ねていく」

「1月にマイティバーの電設備や燃料電池の導入、オンライン受注システムを標準納期は変えず、業務を効率化する。現状は約6割がネット取引に

（谷山 恵三）